

平成5年度

新津市内遺跡確認調査報告書

1994

新津市教育委員会

例 言

1. 本書は新潟県新津市に所在する遺跡のうち、平成5年度に実施した舟戸遺跡（新津市大字古津字腕田1899他）^{ふなと}・大入遺跡（新津市大字金津字居村190他）^{おおいり}の確認調査報告書である。
2. 調査は国庫補助金・県費補助金を受けて実施した。
3. 調査により出土した遺物や作成した図面・写真などは新津市教育委員会が一括して保管している。
4. 調査および本書の作成は作業員の協力を得て渡邊が行った。
5. 調査体制
調査主体 新津市教育委員会（教育長 川瀬敏夫）
総 括 榎本泰伸（生涯学習課長）・吉沢 功（同課長補佐）
調査担当 渡邊朋和（生涯学習課主事）
事務局 上沼 茂（生涯学習課係長）・小島静子（同主査）・川崎昌晃（同主事）・阿達哲二（同技士）
作業員 地元の方々
6. 調査から本報告書の作成に至るまで下記の方々・機関よりご指導・ご助言をいただいた。
新潟県教育庁文化行政課・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社小川組・穴澤義功・川上貞雄
坂井秀弥・品田高志・高橋 保・三浦泰介

目 次

I はじめに	1
II 舟戸遺跡	4
III 大入遺跡	6
IV ま と め	8

写真図版目次

図版1 空中写真
図版2 舟戸遺跡調査風景・1T・2T・3T
図版3 舟戸遺跡4T・5T・出土遺物
図版4 大入遺跡近景・調査風景・1T・2T
図版5 大入遺跡1T・2T・3T・4T・5T
図版6 大入遺跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図 新潟平野の地形概念図	1
第2図 新津市周辺の主要遺跡	2
第3図 周辺の遺跡分布図	3
第4図 舟戸遺跡土層柱状図	4
第5図 舟戸遺跡開発区域図	5
第6図 舟戸遺跡調査位置図	5
第7図 大入遺跡調査位置図	7
第8図 大入遺跡検出遺構全体図	7

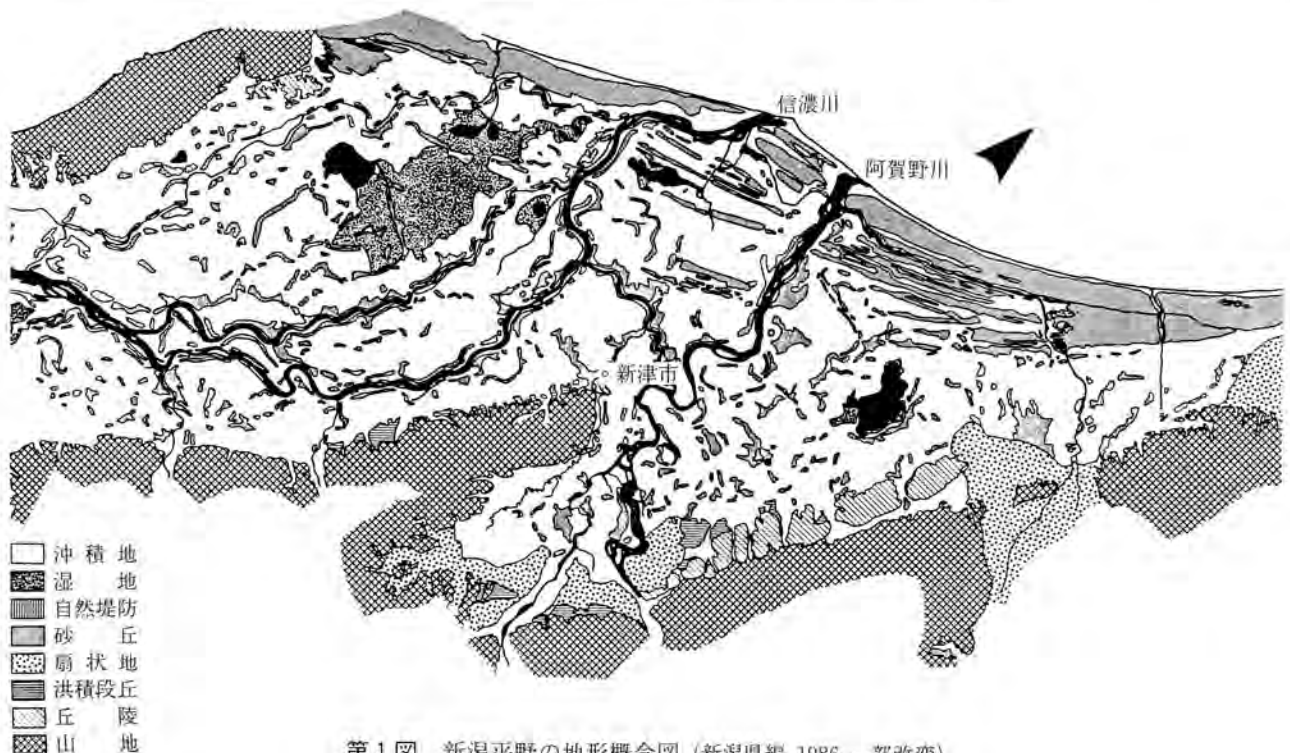
I はじめに

新津市は新潟県のほぼ中央、新津丘陵の北端に位置し、市域の大半は平坦な沖積平野と起伏の小さな丘陵とからなっている。市域の西を信濃川、東を阿賀野川が流れ、北は両河川をつなぐ小阿賀野川を挟んで、県都新潟市と境を接している。丘陵の東縁には能代川^{のうだがわ}が南東から北西に流れる。この川は河川改修以前は川幅が狭く、流下能力も小さいため、度々洪水を繰り返し市民を苦しめてきた。平野部は自然堤防などの微高地が近世以降居住域となっているほかは、圃場整備が進んだ水田が一面に広がる豊かな穀倉地帯となっていた。ところが近年は、新潟市のベッドタウンとして注目され、特にJR沿線は宅地化の波が押し寄せ、沖積平野の様相が一変しつつある。

市内では現在75か所の遺跡が確認されている。旧石器・縄文・弥生時代と古代・中世の生産遺跡（製鉄遺跡、須恵器・土師器窯跡）は丘陵上や丘陵裾部に立地し、古代・中世の集落遺跡は沖積平野の微高地に立地する。近年の沖ノ羽遺跡（26）・上浦遺跡（30）の発掘調査により、古墳時代中期になると丘陵の縁辺や沖積平野に立地する遺跡が出現し、長沼遺跡（33）など7世紀後半頃になると、沖積平野上の微高地に大規模な遺跡が営まれることがわかってきた。

丘陵上に立地する生産遺跡は、新津丘陵北西側の金津地区で昭和62・63年度に実施した確認調査により、7遺跡9地点以上にわたる大規模な製鉄遺跡群が存在することが判明した（金津丘陵製鉄遺跡群）。その後、平成元年度から平成3年度にかけて行った発掘調査により、製錬炉（箱形炉・堅型炉）と多数の木炭窯が検出され、この地域が奈良時代から平安時代にかけて鉄生産を行った一大拠点だったことが明らかになった。共伴遺物が少なく時期を特定しきれないが、炉形態や製鉄炉・木炭窯の構造などからみて8世紀代から10世紀頃にかけての遺跡と考えられる。

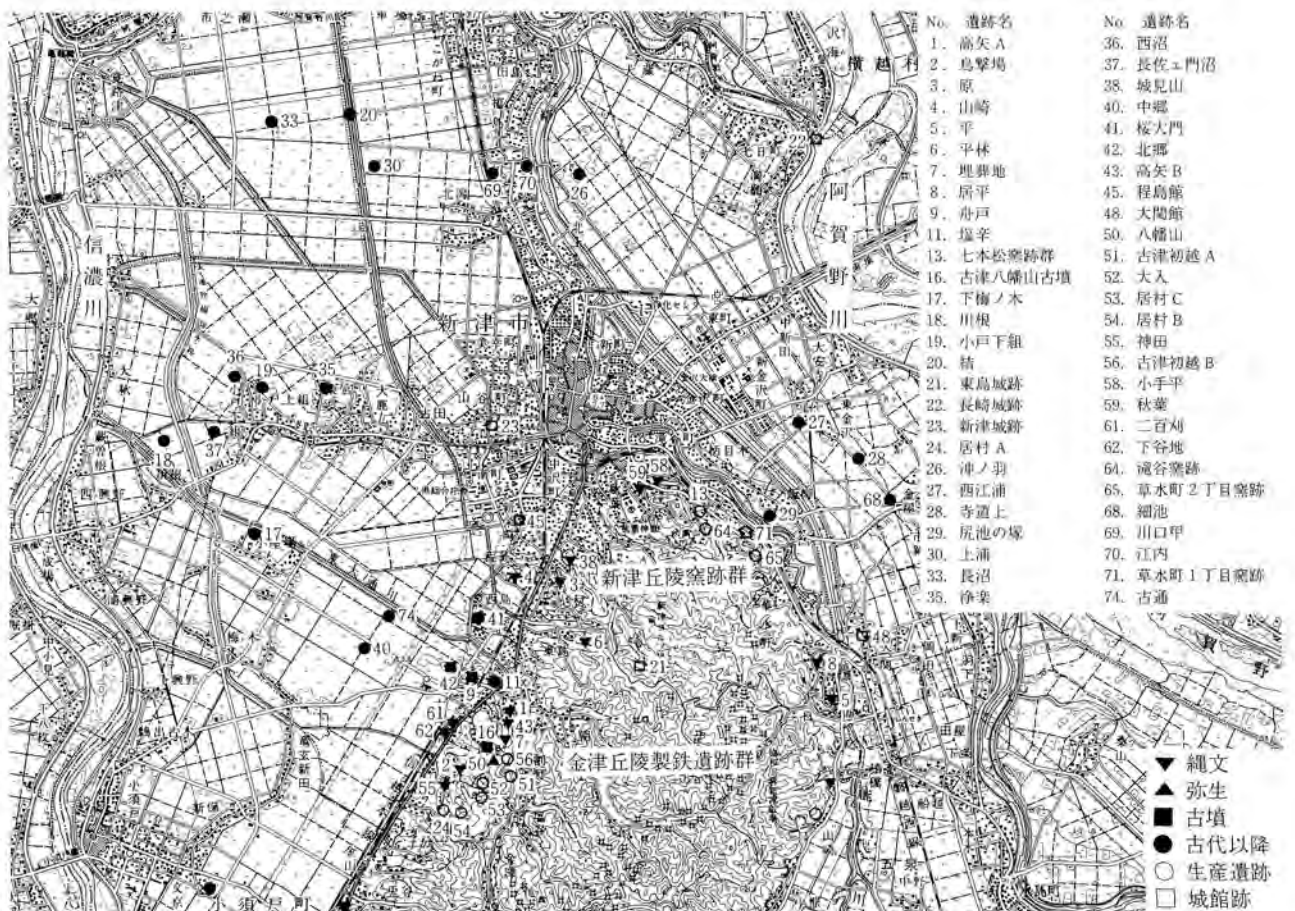
一方、丘陵北東側斜面では、以前から須恵器窯跡が多数あるところとして知られており、昭和27年発行の『新津市誌』には「大字田家字山崎・中山・滝谷・銭瓶沢の間」には18か所の窯跡があると記されている。しかしその後十分な調査がなされないまま宅地化が進んだため、現在これらの窯跡の正確な所在地は不明確になっている。昭和29年には北方文化博物館の主催により七本松窯跡（13）が発掘調査されているが、ようやく最近の市史編纂事業によって七本松窯跡から山崎窯跡（五泉市No.12）にかけて数か所の窯跡の存在が明らかにされている。古代の遺跡を調査すると、当時新津市域が属した蒲原郡のみならず、隣接する沼垂郡の遺跡からも新津丘陵産の須恵器が相当量出土しており、新津丘陵に



第1図 新潟平野の地形概念図（新潟県編 1986 一部改変）

おける須恵器生産がかなり大規模に行われていたことを窺わせる（新津丘陵窯跡群）。新津丘陵窯跡群における須恵器生産は8世紀前半から9世紀中頃が主体で、長沼遺跡出土資料などを勘案すると7世紀後半まで遡る可能性があると考えられている。平成5年度には市史で3点の須恵器と共に初めて紹介された草水町2丁目窯跡（65）で宅地造成が計画され、発掘調査によって、須恵器窯1基・土師器窯10数基・粘土採掘坑や掘立柱建物跡などが検出された。遺物も平箱で500箱以上出土し、新津丘陵の窯業生産を再認識するよいきっかけとなった。この草水町2丁目窯跡も市史で紹介されなければ発掘調査されずに破壊されていた可能性があり、宅地化が進んでいるとはいえこの地域の未周知の遺跡の発見につとめる必要性を痛感した。

平野部の遺跡は、磐越自動車道建設に伴い、平成2年度から平成4年にかけて県教育委員会・県埋蔵文化財調査事業団が上浦遺跡（30）・沖ノ羽遺跡（26）・寺道上遺跡（28）・細池遺跡（68）・江内遺跡（70）の5遺跡の発掘調査を行ったことを契機に、それまで点としてしか把握されていなかった遺跡が分布調査や確認調査によって広がりのある面として周知化されることになったのである。市内の沖積平野に立地する遺跡は現地地表下100～150cm程の深さに包含層があるため、その所在がわからなかったり、範囲が不明確であったりして、あまり注目されることもなかったのだが、これらの発掘をきっかけにして、平野部には予想以上に遺跡が存在することが明らかになった。平成4年度に市教育委員会が工業団地予定地で行った上浦遺跡（30）の発掘調査では水田面の1m程下から平安時代の有力豪族の居宅域が発見され、県内初という大変希少な三彩小壺が出土した。これなども大規模開発とはいえ、近くで磐越自動車道関連の発掘調査があったからこそ、試掘調査によって新たに遺跡が発見されたのである。このように近年の発掘調査により、新津市の平野部には予想以上に遺跡が多く分布し、また大規模な遺跡が残されていたことが明らかになってきた。小阿賀野川を挟んだ北側の新潟市域が、砂丘列以外は低湿地帯だったため遺跡が存在しない、と考えられているとは対照的である。このことは土壌地盤が安定して生活がしやすかったということも一因ではあるが、鉄とやきもの（須恵器・土師器）の一大生産地を背後に控えているという地理的要因も大きかったものと思われる。



第2図 新津市周辺の主要遺跡（国土地理院 1991年 新津 1：50,000を80,000に縮小）

1	高兵 A	縄文中期-後期
2	高兵 B	縄文
7	埋蔵地	縄文中期-後期・弥生後期-古墳前期
9	海戸	古墳中期・奈良-平安
11	遺跡	奈良-平安
12	高兵 C	古墳中期
16	古津八幡山古墳	古墳前期
23	厩村 A	奈良-平安(製鉄)
42	北郷	古代?
43	高兵 B	縄文
50	八幡山	弥生中期-後期・古墳前期・平安
51	古津初郷 A	古代(製鉄)
52	大久	奈良-平安(製鉄)
53	厩村 C	奈良-平安(製鉄)・奈良後期
54	厩村 B	平安(製鉄)
55	神田	縄文・古代
56	古津初郷 B	奈良-平安(製鉄)
61	二百軒	縄文・古代?
62	下谷地	縄文



第3図 周辺の遺跡分布図 (新津市 1986 1:10,000)

Ⅱ 舟 戸 遺 跡

1 遺跡の概要

本遺跡は新津市大字古津字腕田^{かいただ}1899番地他に所在する。新津丘陵北西側の裾端部に位置し、埋没した自然堤防上か扇状地上に立地する遺跡と考えられる。現在開発予定地は埋立てによって標高約10mを測るが、古い更正図によると、かつては水田や畑地として利用されていた。現況は道を挟んで北が荒蕪地、南が果樹畑となっている。開田工事で排水路掘削中に地表下70cm程の深さから遺物が出土したとして昭和48年に周知化されている。市史で報告されている資料は、5世紀頃の土師器高杯・杯、平安時代の須恵器杯・土師器の甕・鍋・椀と中世の珠洲焼きなどである。

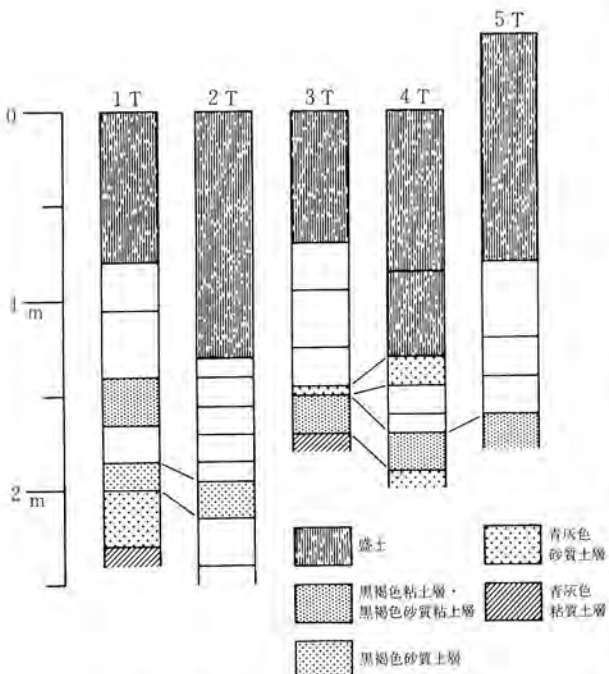
2 調査の概要

周知の遺跡範囲内で建設会社の社屋建設が計画されたため、事業者と教育委員会で協議した結果、遺跡の有無、範囲・性格を明らかにするために確認調査を行うことになった。開発面積は2,872㎡であるが、建造物以外は砂利敷きとして駐車場に用いるということなので、時間的制約もあり調査対象から除外した。その結果調査対象面積は約409㎡である。

確認調査は9月20日に実施した。厚い盛土が予測されたため、遺物の出土に注意しながらバックホウで表土から地山まで徐々に掘り下げた後、人力により精査を行い、遺構・遺物の有無を記録した。4T・5Tからは遺物の出土が極めて濃密だったため遺跡の保存を考えて、包含層を全掘しなかった。調査面積は2×4m前後のトレンチ5か所、約40㎡である。全般に掘削深度が深く、湧水と壁面崩落の危険があり十分な精査を実施することはできなかった。

3 調査結果

層序 全体に70～130cmの盛土に厚く覆われている。かつては水田か畑地だったものと思われるけれども、旧表土(耕作土)は存在せず、これを搬出後に盛土を行ったものと考えられる。遺物包含層は、黒褐色粘土層あるいは砂質粘土層で、現地表面から140～190cmの深さを測り、層厚約25cmである。包含層の土質を見ると、同一層内でも上層が粘質で下層になるにつれて砂質分が増す傾向が見受けられた。1Tでは黒褐色土層が2層検出された。下層から遺物の出土はなく、今回の限られた調査所見では包含層は1枚と考えられる。



第4図 舟戸遺跡土層柱状図

2Tでは包含層に相当する土層の堆積が見られなかった。黒褐色土の形成は遺物が河川等によって堆積したのではなく、生活面が地上にあったことを示している。地山と考えられる基盤層はトレンチによって一定せず、青灰色砂質土層・粘土層である。

遺構 1・3Tでピット・土坑と思われる遺構が検出された。1Tでは2層ある黒褐色土層のうち上層の黒褐色粘土層(包含層)下面から掘り込まれた遺構であることが土層断面から観察された。3Tでは地山と考えられる青灰色粘土層を精査したところ、ピット2基と土坑1基が検出された。覆土は包含層と類似した黒褐色粘土層である。

遺物 1T 14点・3T 184点・4T 68点・5T 68点で土器が出土した。出土土器には、刷目調整を行う甕や高杯・鉢等がある。赤彩土器は見られなかった。細片が多く確かなことは言えないが、これらの点から見て弥生時代後期頃の弥生土

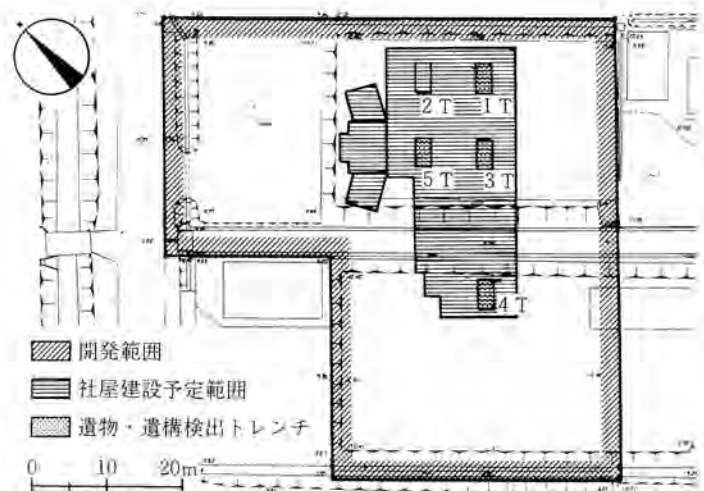


第5図 舟戸遺跡開発区域図 (新津市 1993 1:2,500)

器か古墳時代前期・中期頃の土師器と思われる。全般に焼成が不良で石英・長石・海面骨針を含むものが多い。なお、内面黒色処理をするものが若干存在する。また1点だけ奈良・平安時代と考えられるロクロ整形の土師器がみられた。

まとめ 今回の確認調査対象範囲には、ほぼ全体に遺跡が広がっているものと思われる。出土土器から見て、弥生時代後期か古墳時代前期・中期の遺跡と考えられる。舟戸遺跡は、弥生時代後期の高地性環濠集落である八幡山遺跡、県内最大規模の古津八幡山古墳がつくられた丘陵の裾部に位置している。八幡山遺跡の人々の後裔が住んだ可能性や古津八幡山古墳を造った人々の集落だった可能性もあり、注意を要する遺跡の一つである。時間的制約から建物の造られる範囲外は確認調査を実施しなかったが、今後取扱いに注意する必要がある。

遺跡の取り扱いは、この調査結果をもとに行った県教育委員会との協議により、建物の造られる範囲約470㎡について平成5年10月4日から11月20日にかけて本格調査を実施した。



第6図 舟戸遺跡調査位置図

Ⅲ 大 入 遺 跡

1 遺跡の概要

本遺跡は新津市大字金津字居村190番地他に所在する。新津丘陵北西側斜面に樹枝状に入り組んだ谷の最奥部に位置し、南向き斜面の裾部に立地する。標高は約18m。現状は山林で一番低いところには沢があり、かつては沢蟹・山椒魚などが生息する澄んだ水が流れ、谷部では水田が営まれていた。昭和62年度に金津地区の約45 haの開発計画がおこり、それに起因する分布調査で周知化された。翌年には確認調査が実施され、南斜面の直線距離で約270mの範囲から製鉄炉3基・排滓場・木炭窯12基などが検出された。その後、平成元年度から平成3年度にかけて当地区の4遺跡6地点で発掘調査が行われ、奈良時代から平安時代にかけての製鉄炉・木炭窯などの製鉄関連遺構が多数検出されたため、金津丘陵製鉄遺跡群と称されている。

本遺跡は確認調査の結果、当製鉄遺跡群の中でも遺構密度が高く、主体をなす遺跡である可能性が強いこと、丘陵の尾根上にある弥生時代後期の高地性環濠集落である八幡山遺跡が現状保存されることになり、自然景観上丘陵裾部が重要であるという2点の理由から、主要部分は現状保存されることになった。なお記録保存と決まった本遺跡の最も西寄りの地区では発掘調査の結果、竪型炉1基・木炭窯3基などの遺構が検出された。

なお、沢を挟んだ反対側の斜面裾部では8世紀代と考えられる箱形炉1基と木炭窯3基が調査されており、今までに発掘調査された金津丘陵製鉄遺跡群の中で最も古い製鉄炉と推定されている。

2 調査の概要

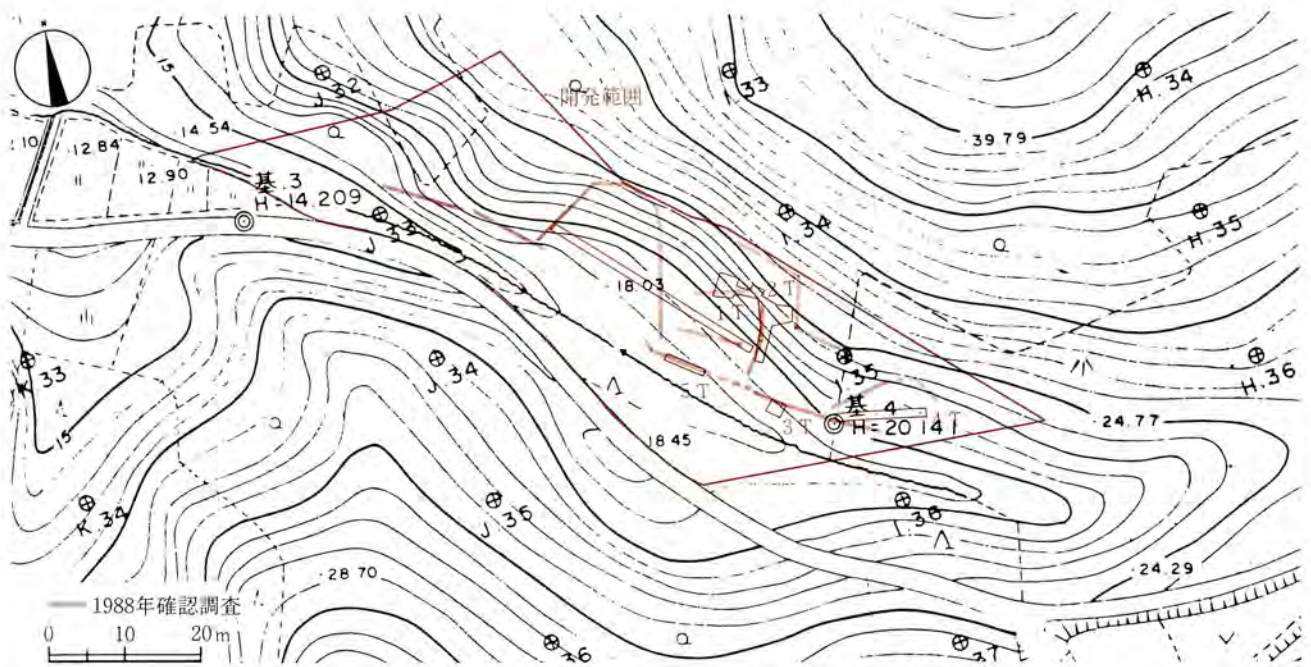
現状保存された周知の遺跡範囲の一部で土取りを伴う開発が計画された。市教育委員会と県教育委員会で協議した結果、昭和63年度に実施した確認調査では、調査面積が少なく、遺構の正確な数、遺構の種別が明らかではないということで、再度確認調査を行うことになった。

確認調査は11月22日～30日に実施した。トレンチは昭和63年度の調査で遺構が検出された場所とその周辺に設定し、遺構の性格を明確にすることを目的とした。さらに本格調査で調査期間に大きく影響することになる排滓場の規模と箱形炉・竪型炉など炉形態をはっきりとさせるよう努めた。調査対象面積は約2,300㎡、調査面積は約81㎡である。

3 調査結果

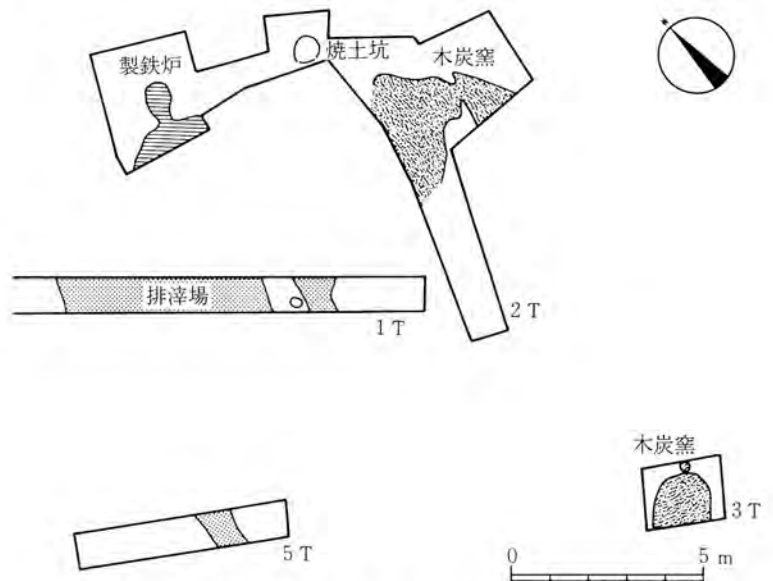
層序 平坦面に青灰色粘土層・砂質粘土層が堆積し、明黄褐色砂質土がその上に覆うように、丘陵斜面から平坦面にかけて堆積している。

遺構 斜面中央部の比較的平坦な場所に地形とはほぼ平行になるよう幅1mの1Tを設定した。トレンチの西側では窪地の堆積土と考えられる青灰色砂質粘土層が見られた。特に遺構・遺物等は検出されず、さらに西側は急斜面のため遺構等は存在しないものと判断した。トレンチの東側では、斜面からの流入土と考えられる明黄褐色土層を掘り下げたところ、その下から幅約7mにわたって鉄滓層の広がりが見られた。鉄滓層の深さを確かめるため、一部の深掘りを行い、表土下約60cmまで鉄滓が見られることを確認した。斜面裾部の2Tは、昭和63年度の確認調査で遺構の検出された部分を拡張し、遺構の種別を確かめるために設定したトレンチである。その結果、製鉄炉1基と作業場、木炭窯1基と前庭部を検出した。製鉄炉は長軸1m、短軸0.7m程で、いわゆる竪型炉に属するものである。炉の上部では作業場は検出されなかった。炉の下部には地山面の掘り込みが観察され、排滓溝を兼用した作業場が存在したものと推測された。木炭窯は、前庭部の平面形態は木炭粒の広がりからとらえることができた。窯体部は明確に検出することができず、遺構の築かれた斜面が急なため、地下式構造の木炭窯ではないかと考えられる。3Tも昭和63年度の調査で遺構が検出されていた。今回の再調査により、奥壁煙道と窯体が検出され木炭窯であることを再確認した。斜面の最も下のほうに築か



第7図 大入遺跡調査位置図

れ、全長3mに満たない大きさと推測されることから、比較的新しい時期に造られた民生用の木炭窯ではないかと考えられる。4Tは、2Tの東側から3Tの方向に延びた尾根筋の東側にあたり、谷筋の最も奥まったところにあるわずかな平坦面にあたる。表土から80cmほど掘り下げても、窪地の堆積土と考えられる青灰色粘土層が続き、遺構・遺物等は検出されなかった。5Tは1Tから5m程斜面の下方のトレンチで、排滓場の広がりをもとめ設定した。トレンチの東側の部分から幅1m位の排滓溝が検出され、製鉄炉から10m近く離れた場所にも鉄滓が廃棄されていることが確認された。



第8図 大入遺跡検出遺構全体図

遺物 1・2・5Tなどで炉壁・鉄滓・木炭等が出土した。土器・石器等は発見できなかった。鉄滓の様相を見ると、竪型炉という炉形態にしては、流れ出たようないわゆる流動滓の比率が比較的多いように見受けられた。炉壁には砂鉄が厚く付着するものがあり、あまり還元化が進んでいない結果と考えられる。

まとめ 確認調査の結果、古代の製鉄関連遺構として、竪型の製鉄炉1基とその排滓場1か所、地下式構造と考えられる木炭窯1基が検出された。所属時期を決める遺物の出土がないため不確実ながら、製鉄炉や木炭窯の形態から判断して9世紀頃のものではないかと考えられる。沢を挟んだ反対側の斜面で検出された3基の木炭窯は何れも長さが10m以上もある長大なもので、半地下式構造で造られていた。形態や構造から見て、同時に検出された8世紀代の箱形炉に伴うものと考えて問題はない。そうすると今回確認された製鉄炉1基に対して、木炭窯が1基しか検出されず少なすぎる感じがする。未調査の範囲にさらに木炭窯が存在する可能性が残されている。

遺跡の取り扱いについては、この調査結果をもとに県教育委員会と協議した結果、平成6年度に本格調査を実施することになった。

Ⅳ ま と め

平成5年度には、舟戸遺跡と大入遺跡の2遺跡の確認調査を行い、新たな知見を得ることができた。

舟戸遺跡は、その後10～11月に実施した本格調査により、数棟の竪穴住居址や多量の土師器が検出され、今回の調査地点では、遺跡の主要な時期が古墳時代中期であることが明らかになった。また、周辺の聞き取り調査によって周知の遺跡範囲を超えたかなり広い範囲に遺跡が広がっていることも明らかになった。付近には高矢C遺跡など同時期の遺跡がほかにもある。舟戸遺跡・高矢C遺跡とも確実な範囲が不明確なため、今後の確認調査等によっては一つの遺跡になる可能性も十分に考えられ、そうするとこの地域でも拠点的な大集落となるであろう。遺跡は弥生時代後期の高地性環濠集落である八幡山遺跡、県内最大規模の古津八幡山古墳がある丘陵の裾部に位置する。八幡山遺跡からは直線距離で北北西方向に1km程しか離れておらず、これらの丘陵上にある遺跡との関係を抜きにしては考えられない。今のところ、丘陵上にある八幡山遺跡・古津八幡山古墳と同時期の弥生時代後期・古墳時代前期の遺跡は、平野部には確認されていない。また、平野部にある舟戸遺跡と同時期の古墳時代中期の遺跡(古墳)は、丘陵上には確認されていない。この地域は、新津市にとどまらず、蒲原郡における弥生時代から古墳時代の歴史を語る上で看過できない地域である。近年古津駅西側では急速に宅地開発が進んでおり、すでに遺跡が破壊されてしまった部分もあると思われる。今後、より一層遺跡の保護に努めていきたいと考えている。

大入遺跡は平野部から最も奥まった位置にあり、南向きの穏やかな斜面が広がる。製鉄に適した地形であるという点や以前に行った確認調査の結果から判断して、金津丘陵製鉄遺跡群のなかで中核をなす製鉄遺跡と考えている。今回の確認調査地点では製鉄炉1基に対し、木炭窯が1基しか検出されず、木炭窯の数が少ない。昭和63年度の確認調査では現状保存範囲に多数の木炭窯が検出されており、それらが組合わさる可能性が高いと考えられる。現状保存範囲については、今後の歴史教育の場として有効な活用をしていきたいと考えている。

引用・参考文献

- 甘粕 健・川村浩司ほか 1992 『古津八幡山古墳Ⅰ』 新津市教育委員会
- 伊与部倫夫 1989 「新潟県八幡山遺跡」『探訪弥生の遺跡』畿内・東日本編 有斐閣
- 川上貞雄 1990 「新潟県新津市八幡山遺跡」『日本考古学年報』41(1988年度版) 日本考古学協会
- 川上貞雄 1992 『川口甲遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫ほか 1989 『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市史編さん委員会
- 北村 亮 1991 「上浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.7
- 小林 存 1952 『新津市誌』 新津市役所
- 坂井秀弥ほか 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
- 関 雅之 1979 『新津市における考古遺跡と遺物について(1)』『新津郷土史』第3号
- 関 雅之 1979 「新津市における考古遺跡と遺物について(2)」『新津郷土史』第6号
- 中川成夫・倉田芳郎 1956 「新津田家七本松須恵器窯址発掘調査報告」『越佐研究』第11号
- 新潟県編 1986 『新潟県史』通史編1 原始・古代
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1992 「遺跡の発掘調査(平成4年度)」『埋文にいがた』No.2
- 渡邊朋和 1990 「居村C・D・E遺跡」『新潟県埋蔵文化調査だより』No.6
- 渡邊朋和 1990 「新津市金津丘陵製鉄遺跡群」『新潟県考古学会第2回大会研究発表会一発表要旨一』
- 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1993 「上浦B遺跡」『埋文にいがた』No.2



舟戸遺跡

古津八幡山古墳

八幡山遺跡

大久遺跡



調査風景（北東から）



調査風景（北西から）



1T 土層断面



1T 土層断面 柱穴検出状況



2T 土層断面



3T 土層断面



3T
土層断面



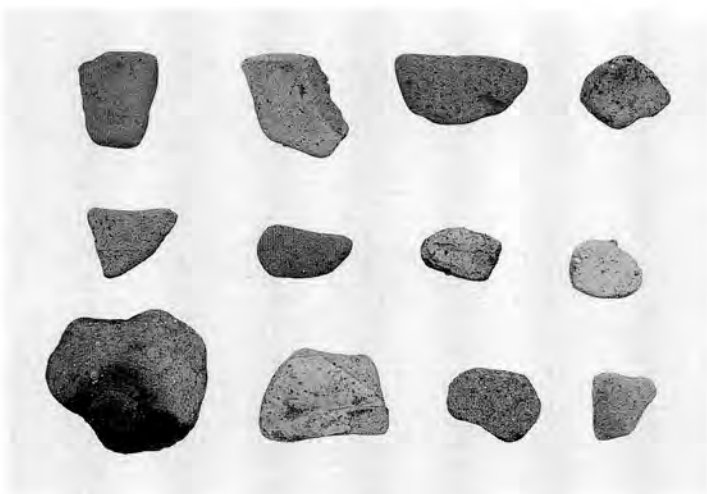
3T 遺構検出状況



4 T 土層断面



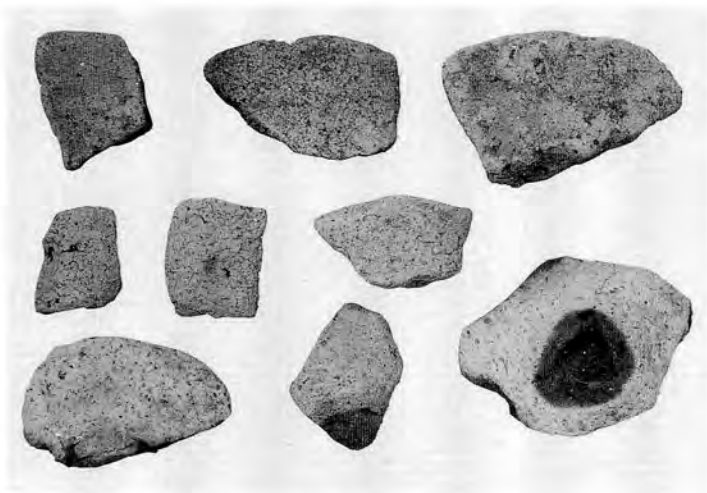
5 T 土層断面



土師器 (1T)



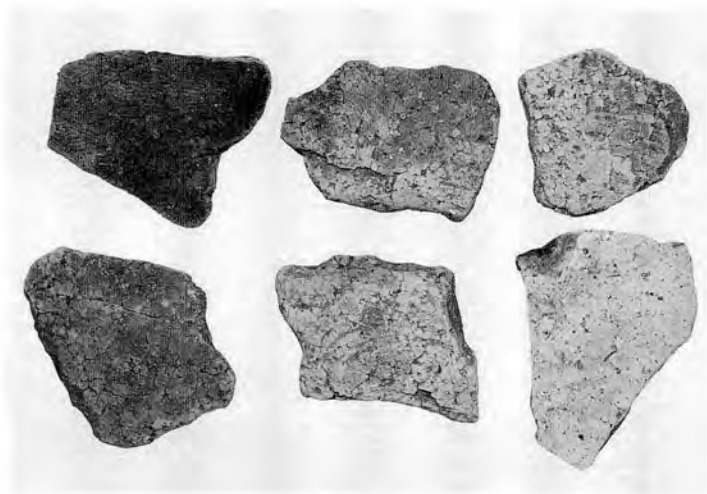
土師器 (3T)



土師器 (3T)



土師器 (4T)



土師器 (4T)



土師器 (5T)



遺跡近景 (南西から)



遺跡近景 (南から)



調査風景 (南から)



調査風景 (南から)



1 T 排滓場・2 T 製鉄炉 (東から)



2 T 製鉄炉・焼土坑・木炭窯 (南西から)



2 T 製鉄炉・焼土坑 (南西から)



2 T 製鉄炉 (南から)



1T 完掘状況 (西から)



1T 排水場 (東から)



2T 焼土坑 (南西から)



5T 排水溝 (東から)



2T 木炭窯 (南西から)



3T・4T 完掘状況 (南西から)



3T 木炭窯 (南西から)



4T 完掘状況 (西から)



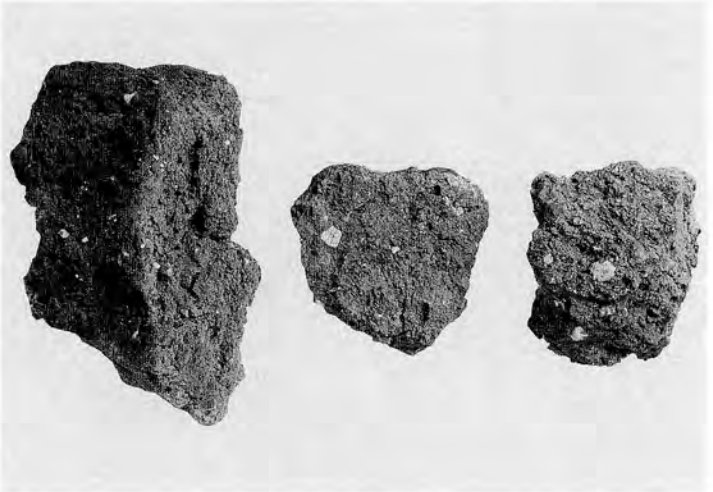
炉壁 (1T)



同裏面



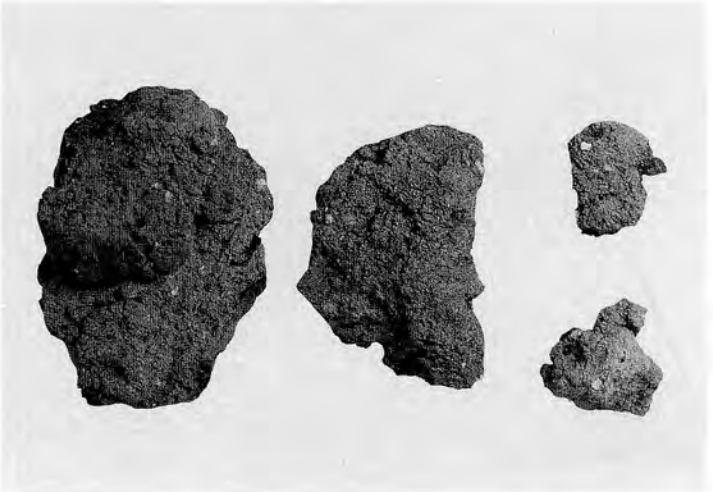
炉壁 (1T)



同裏面



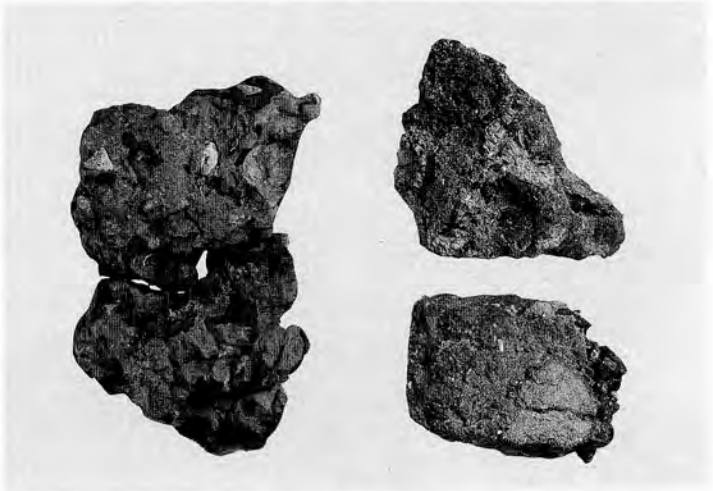
炉壁 (2T 製鉄炉周辺)



同裏面



流動滓 (1T)



同裏面

報告書抄録

ふりがな	へいせい5ねんどにいつしないいせきかくにんちようきほうこくしよ							
書名	平成5年度新津市内遺跡確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	新津市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	渡邊朋和							
編集機関	新津市教育委員会							
所在地	〒956 新潟県新津市程島2009番地 TEL 0250-22-9667							
発行年月日	西暦 1994年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなと 舟戸遺跡	いづまがけん にいつし おおあざ ふなつ あざ 新潟県新津市大字古津字 腕田	207	9	37度 45分 12秒	139度 6分 56秒	19930920	40	確認調査
おおあざ 大入遺跡	いづまがけん にいつし おおあざ かなづ あざ 新潟県新津市大字金津字 居村	207	52	37度 45分 25秒	139度 7分 14秒	19933122～ 19931130	81	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
舟戸遺跡	集落	古墳時代中期		土師器				
大入遺跡	製鉄	平安時代	製鉄炉・木炭窯	鉄滓・木炭				

平成5年度

新津市内遺跡確認調査報告書

1994年3月30日発行

発行 新津市教育委員会
新潟県新津市程島2009番地
〒956 TEL (0250)22-9667

印刷 長谷川印刷
新潟市小針1丁目11-8
〒950-21 TEL (025)223-0321